

の為の拠点としての役割をも果したのである。このように、華林園は六朝時代の仏教を明らかにする上で、見過ごすことの出来ない重要な施設であり、更に研究を進める必要がある。

註① 華林園については、村上嘉実「六朝の庭園」(『六朝思想史研究』所収)の中に詳細な研究がなされている。しかし、これは華林園を単なる庭園として取り上げたものであり、華林園が仏教受容に果たした役割については言及されていない。

② 宮室を造営しようとする明帝に対して、王朗が上疏した文の中で、華林(園)について次のように言及している。

今当建始之前足用列朝会、崇華之後足用序内官、華林天渚足用展游宴、……(『魏志』卷一三王朗伝)

また『文選』卷二〇「晋武帝華林園集詩一首」の李善の注に「洛陽園経」を引用し、

華林園在城内東北隅、魏明帝起名芳林園、齐王芳改為華林、とある。これが最も妥当な考察であろう。

③ 『晋書』卷五九趙王倫伝、

倫又矯詔開門夜入、陳兵道南、遣羽軍校尉齊王罔、將三部司馬百人、排閣而入、華林令駱休為内応、迎帝幸東堂、遂廢賈后為庶人、幽之于建始殿、……惠帝乘雲母車、鹵簿數百人、自華林西門出、居金墉城、……倫乃僭即帝位、……倫請宗室会於華林園、

④ 『魏書』卷一三宣武靈皇后

太后与肅宗幸華林園、宴群臣于都亭曲水、清の趙翼は『陔餘叢考』の中で次のように云う。

⑤ 『宋書』前廢帝紀、

戊午夜、帝於華林園竹林堂射鬼、時巫覡云此堂有鬼、故帝自射之、

⑥ 『弘明集』卷一九の陸雲「御講波若經序」(大正藏卷五二・二三五・b)

華林園者、蓋江左以來、後庭遊宴之所也、自晋迄齊、年將二百、世屬咸

夷、主多奢僭、舞堂鐘肆、等阿房之旧基、酒池肉林、同朝歌之故所、自至人(梁武帝)御宇、屏棄色声……身心安樂、寔符歡喜之園、

⑦ 大正藏卷五〇・四六四・c。

⑧ 大正藏卷五〇・四六二・b・c。

⑨ 大正藏卷五〇・三四九・c。

⑩ 『梁書』武帝本紀の大通元年の条に「三月辛未、輿駕幸同泰寺捨身」とあり、同様の記事が『梁書』の中に頻繁に見られる。また同泰寺に於ける講經の記事も多い。

⑪ 朱俛「金陵古跡図考」参照。

⑫ 大正藏卷五〇・四二六・c。

⑬ 拙稿「梁代仏教における釈宝唱の役割」(『浄土宗学研究』第一四号所収)の中で、宝唱の『衆經目錄』について詳述している。

### 中国に於ける仏教の受容

— 支謙と康僧会 —

稲岡誓純

中国仏教史上いたって初期である三国時代の呉を代表する仏教者として、支謙と康僧会とが挙げられる。本小論においては、この両者を総合的に比較しながら、特に中国に於ける仏教の受容の上からの位置づける試みしようとするものである。

支謙の伝記は、梁の僧祐撰の『出三藏記集』卷第三に支謙伝があるのみである。しかし同書卷第六道安伝、卷第七支敏度伝、そのほか梁の慧皎撰の『高僧伝』卷第一康僧会伝などにも付記されている。

康僧会の伝記は、『出三藏記集』卷第十三の康僧会伝、『高僧伝』卷第一の康僧会伝として収録されている。そのほか『釈氏六帖』卷第六、『六学僧伝』卷第二、『仏祖綱目』卷第二十三、『高僧摘要』卷第四などにも所収されている。

(一) 出生

『出三藏記集』卷第十三に  
支謙。字恭明、一名越。大月氏人也。祖父法度、以漢靈帝世、率国人數百歸化。拜率善中郎將。

と、支謙は字は恭明また支越ともいい、大月氏系の帰化人で洛陽生まれである。

康僧会は同書卷第十三に、

康僧会。其先康居人。世居天竺、其父因商売移于交趾<sup>②</sup>。

とあるように、彼は康居系の帰化人である。

このように大月氏系の洛陽生まれと、康居系の交趾生まれとの差はあるが、両者とも帰化人である。

## (二) 仏教入門

『出三蔵記集』卷第八の支敏度の「合維摩詰経序」に、

在昔漢興始流茲土。于時有優婆塞支恭明<sup>③</sup>。

と伝えているように、支謙は優婆塞すなわち在家の仏教信者なのである。このことにより、彼が中国仏教史上、偉大な業績を残したにもかかわらず、『高僧伝』等に彼の伝記が収録されていない根本的な理由となっている。しかし、

十歳学書。同時学者、皆伏其聡敏。十三学胡書。備通六国語<sup>④</sup>。

と『出三蔵記集』卷第十三にあるように、支謙は幼少時代より中国的な教養はもちろんのこと、胡語など六ヶ国語にまで通じたということは、やがての仏典翻訳者としての素地を十分に養っていたことが窺われる。そしてさらに同書に、

初桓靈世。支謙訳出法典。有支亮紀明資学於謙。謙又受業於亮。……其本奉大法精練経旨<sup>⑤</sup>。

とあるように、支謙は大乗仏教系の支婁迦讖——支亮という学系を汲んだ研究者であるばかりでなく、彼は大法（仏教）を奉ずる心、すなわち奉仏心の厚い仏典の研究者でもあったのである。

一方康僧会は、

会年十余歳、二親並亡。以至性聞、既而出家。礪行甚峻、為人弘雅有識量篤志好

学明練三蔵。博覽六典、天文図緯、多所貫涉并於枢機頗厲文論<sup>⑥</sup>。

と、康僧会は不幸にも十余歳で両親と死別したので、すでにその地方に流伝していたと思われる仏教に身を投じ、出家したのである。そして彼の僧としての人格は、仏教の行と学とに熱心であったことはいまでもなく、当時の知識階級的な教養、さらに予言者の・呪術師的な信仰が流布している建業に仏教宣布のために入るに適した素養を備えていたのである。

そしてさらに続いて、

宿祚未没、会见南陽韓林、穎川皮業、会稽陳慧。此三賢者、信道篤密、執德弘正。蒸蒸

進進志道不倦、余之從請。問規同矩。合義無乖。異陳慧注義、余助斟酌、非師不伝不取自由也<sup>⑦</sup>。

と、彼は南陽（河南省）の韓林・穎川（河南省許昌地方）の皮業・会稽（浙江省）の陳慧の三賢人に教えをうけたのである。そして特に陳慧の説によって安世高訳の『安般守意経』の序を著したのである。

## (三) 仏教宣布活動（呉朝との関係）

『出三蔵記集』卷第十三に

後呉主孫権、聞其博学有才慧、即召見之。因問經中深隱之義、応機釈難、無疑不

析。権大悦、拜爲博士、使輔導東宮、甚加寵秩<sup>⑧</sup>。

と、呉主孫権自身が必ずしも奉仏に對して共感したことを意味するとは思われないうが、支婁迦讖——支亮——支謙という流れの仏教が、呉主の庇護を蒙ったことを示しているのである。これは、彼が献帝（一九〇—二二〇在位）の末年に、二十数歳という若さで中原の戦乱を避けて、郷人数十人を率いて南下し呉都建業に入ったのである。ちょうどこの頃孫権は孫策の後を継承し江南を支配し、北の魏（曹氏）と揚子江上流の蜀（劉氏）と勢力を争っていたまさしく三国時代のときであった。その時洛陽から博学多識で中国語のほか胡語まで話すことができる支謙が来たことは、対立勢力の魏国の状勢を問ううえに最適の人物であるから、若いながら呉主孫権に認められ、博士に任ぜられ太子を輔導する任を与えられたのである。そして呉都建業で黄武元（二二二）年より建興年間（二五二—二五三）に至る約三十年間、仏典の翻訳活動、仏教の宣布活動を行なったのである。

一方、康僧会は、『高僧伝』卷第一に

以呉赤鳥十年、初達建鄴。營立茅茨設像行道。時呉国以初見沙門、覩形未及其

道、疑爲矯異。有司奏曰、有胡人入境、自称沙門、容服非恒、事応檢察<sup>⑨</sup>。

とあるように、康僧会は呉の赤鳥十（二四七）年に呉の都建業に至り、茅茨を造立して像を設け仏道を行じたのであるが、建業の人々は初めて沙門を見たが、形だけを窺うだけで仏道にまで及んでいないのかと疑いばかりで矯異であるとした。またかかりの役人は胡人の境遇に入り、自ら沙門と称し、その服装が恒でないので、まさに檢察しなければならぬとまで言っているのである。

このように、呉の初めに洛陽から南下して呉王朝と深い関係をもって活躍した支謙は奉仏者であり、訳経に力を注いだと雖も優婆塞であり、寺廟に住む僧でなかったのである。一方、建業において支謙が活躍していた後期に、建業に来た康僧会は戒律を守る出家修道者であり、在家の人々から離れて修道する道場、つまり仏寺が必要ならなければならない。その結果、呉の都建業における最初の仏寺建設の開祖となり、国家や官吏に依存したものでなく、一般の人々とのふれあいから生じる仏教宣布活動が見られる

のである。

(四) 訳経經典

最後に両者の業績の最もたる仏典の翻訳活動のうち、仏教の受容の立場から、それぞれの訳経經典のうち一經典づつをみてみることにする。まず訳経数の多い支謙のものうち『太子瑞應本起經』に注目する。この『太子瑞應本起經』は康孟祥の出したものとやや異り、陳郡の謝繡、吳郡の張洗等が筆受し、魏の東阿王植が評定したものである。本經は仏教が中国に伝来し受容されるにあたり、最も効果があり、影響の大きかった翻經典で、後漢の建安二(一九七)年に竺大力と康孟祥の共訳の『修行本起經』の同本異訳の積尊伝である。その他、『弘明集』卷第一の「牟子理惑論」、西晋の竺法護訳の『普曜經』、西晋の耳道真訳の『異出菩薩本起經』、劉宋の求那跋陀羅訳の『過去現在因果經』、劉宋の宝雲訳の『仏本行經』等の仏伝類が支謙の時代前後に数多く翻訳されている。しかし、支謙のような人物、すなわち中国語はもろろん胡語にまで通じ、吳王朝と密接な関係をもった仏教者が積尊伝を改変したことはまことに大きな意義が認められる。『般若經』のように哲学的・教理的に深い仏典とは異り、仏教教理を深く理解できない一般の人人にとつて、仏教の始祖である積尊については最も関心の深いものであり、しかもその伝記となれば知識の必要性もあまりなく、聞いて伝える域で充分と思われるからである。

康僧会の訳経の主と思われる『六度集經』についても、また同様のことが言える。本經は仏教説話であるジャータカすなわち前生話である。総計九十一のジャータカが六度(六波羅密)の布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の各々に配当し集められているところから、『六度集經』といわれ、卷第一の「普施商主本生」は劉宋の求那跋陀羅訳『大意經』卷第二の『須大掣經』は西晋の聖堅訳『太子須大掣經』、卷第四の『太子墓魄經』は安世高訳『太子墓魄經』、西晋の竺法護訳『太子墓魄經』、卷五の「賤道士本生」は西晋失訳『菩薩賤子經』、西晋の聖堅訳『賤子經』、卷第六の「修凡鹿王本生」は吳の支謙訳の『九色鹿經』に各々相当する。このように、積尊の前生話には、先に述べた積尊伝と同様で、康僧会もその任をになつたことは注目すべきである。

以上、支謙と康僧会は両者とも帰化人で吳郡建業で訳経活動、仏教宣布活動を行なつたのであるが、北より南し、優婆塞として吳朝の庇護を蒙つた支謙と、南から北し、沙門として吳朝より警戒の目でいらされた康僧会とは、その手段方法はまったく対照的である。しかし吳を代表する両者について、今後その訳経面から中国に於ける仏教の受容を見ていく必要がある。

註①『出三藏記集』卷第十三支謙伝(大正五五・九七b~c)

- ② 『出三藏記集』卷第十三康僧会伝(大正五五・九六b)
- ③ 『出三藏記集』卷第八支敏度の「合維摩詰序」(大正五五・五八b)
- ④ 註①に同じ
- ⑤ 註①に同じ
- ⑥ 註②に同じ
- ⑦ 『安般守意經序』(大正十五・一六三b~c)
- ⑧ 註①に同じ
- ⑨ 『高僧伝』卷第一康僧会伝(大正五〇・三二五b~三二六b)

## アジャセ異名考

松永知海

一

アジャセの異名を漢字訳仏典のなかで整理してみるとつぎの三種に分けられる。

- ① 阿闍世
- ② 善見
- ③ 婆羅留支

①の漢字訳は梵語になおすと Ajatasaru であり、バリーでは Ajatasaru であり最も多くの文献にでてくる名前である。Ajatasaru は a-jata-saru に分解される。a は接頭辞で否定の意味を表わす。jata は4種動詞為巴の√janに ta がついて過去受動分詞となり「生まれる」という意味である。saru は男性名詞であつて、「怨敵・仇敵」の意味を表わす。故に名前をつけた本来の意図は「敵を生まない」という意味で、敵を生まないほど強い人ということにあつたと考えられる。

②の訳を梵語になおすと Sutarana である。この語は「よい」という意味を持つ接頭辞 su と、中性名詞で「見る」と「訳される darsana とに分解される。そこで「よく見ること」という意味から善見と訳される。この名前の使用例は、北本『大般涅槃經』第三十四とターラナータの『印度仏教史』などに見られる。

③の婆羅留支という語がどのような梵語の訳であるかは、不明である。というのも、漢字訳において婆羅留支と訳されるところを原典にあたると Ajatasaru であつて、そこからこの訳はできない。ところでこの訳は北本『大般涅槃經』第三十四に善見太子復作是言。国人云何罵辱於我。提婆達言。国人罵汝為未生怨。善見復言。